地域エフエム放送局と共に
「かわさきの魅力」を24時間内外に発信中

森敏朗（高20回）

東京同窓会懇親会への出席は約10年振りでしたが、幹事の方にマスコミのテーブルへ案内され、多少の戸惑いを感じながらも、諸先輩や現役世代の方々と楽しく交流させていただきました。ところで、コミュニティ放送（コミュニティFM）をご存じですか？

放送法に規定する基幹放送の一種ですが、放送エリアが地域（市町村単位、政令市は区単位）に限定されたFMラジオです。「地域密着」「市民参加」「防災および災害時の放送」が特徴です。阪神淡路大震災や東日本大震災を経て全国で開局が相次ぎ、2015年9月末で290局を超えました。

運営は第三セクター・民間・NPO等と様々ですが、大規模災害発災時には臨時災害放送として、被災地のきめ細かい情報の提供に努めることになります。

さて、川崎市（人口147万人、15年9月現在）にも市内で唯一の放送局として、私が籍をおくコミュニティ放送「かわさきFM」（かわさき市民放送株式会社）があります。市が主体となり阪神淡路大震災の翌年に設立され、まもなく開局20周年を迎えます。

数年前のことになりますが、私自身が同市に本店を置くメーカーに40有余年勤め、市民としても暮らした縁もあり、放送事業はズブの素人ながら、かわさきFMの経営に携わることになりました。民間出身のため、行政との仕事に当惑する面もありますが、シニア世代となった今、これまでの経験等を社会に還元できればと思っています。小規模なラジオ局ですので、マイクの前に立つことを除き、放送事業全般に関わり、忙しくも充実した日々を過ごしています。

かわさきFMがある川崎市中原区武蔵小杉は、近年の再開発で高層ビルが林立する新しい街へと変貌中で、現行の送信所では放送エリアに影響がでる見込みです。法規制等との調整は必要ですが、より高所への送信アンテナ移設を検討せざるを得ない状況です。都市型コミュニティ放送の新たな課題です。

地元のサッカーJ1・川崎フロンターレのホームゲームは全試合生中継しており、毎回ラジオ実況ブースで陣頭指揮をしています。同時配信のサイマル放送では、いつでも、どこでも、どなたでもインターネット経由で聴くことができます。

今後も引き続き、身近な生活情報や音楽・スポーツ等の文化情報を連日24時間放送するとともに、ここ武蔵小杉から川崎市の内外に「かわさきの魅力」情報の発信を継続します。かわさきFM（79・1MHz）をよろしくお願いします。

東京福岡県人会 同窓会協力委員会主催
「就活を応援する会」に参加して

《講師を務めて》
植村 亜矢子（高57回）

今回、春季キャンプを見に宮崎へ行く予定を変更して、この会でお話をさせていただきました。冒頭からそんなことを書いてしまうくらいの、筋金入りの福岡ソフトバンクホークスファンです。ところで、彼らはどうしてぶっちぎりで優勝することができたのでしょうか？

答えの一つには、工藤監督が掲げた「相手が嫌がる」野球が浸透したことがあげられるでしょう。自らが軸でありながら、相手の視点を常に持ち、様々なケースに対応できる準備が整っていたので、主導権を握り勝利を積み重ねていったというのが私の見解です。「彼を知り己を知れば百戦殆からず」といったところでしょうか。

では、「就活」に話を置き換えてみましょう。「相手」を知らないまま特攻して、撃沈する就活生をよく見かけます。「自分」をアピールするときに「相手」を置き去りにしていませんか。就活における「相手」は、企業であり社会人です。社会人が求めていること、社会人の視点を知ることが就活の第一歩でしょう。

しかし、学生と社会人が就活と関係なく接する機会は、そう多くないと思います。この会は「応援する会」なので、参加すると選考に有利といったことは全くありません。ただ、普通の社会人、しかも様々な業種、年代の方が一同に会し、「福岡」という共通点で盛り上がる機会は貴重です。もし、何から話していいか迷ったら、「私、福高○回の○○です」の挨拶から始めればいいのです。

また、1人の講師が15分で話せる内容は、伝えたいことのほんの一部です。その一部を足がかりにして、より多くのものを社会人参加者から引き出し、吸収できるかは自分次第なのです。この会では普通に仕事をしているだけでは出会えないような方々とのご縁をいただきましたこと、御礼を申し上げますとともに、この会がより発展していくことを祈念いたします。

※

なお、11月28日には東京同窓会主催の「就活を応援する会」が、就活生3名、就活を終えた学生1名、社会人8名が参加して開催されました。

就活生の皆さんには、様々な経験をもつ諸先輩方との会話、交流を通じて、単なる就活の経験やノウハウの話だけでなく、自分らしく前向きに生きることの大切さといったことも感じていただけたかな、と思います。参加いただいた皆さんのほか、呼びかけや運営などに協力いただいた多くの方々に感謝申し上げます。

（会員拡充委員会・広報委員会）